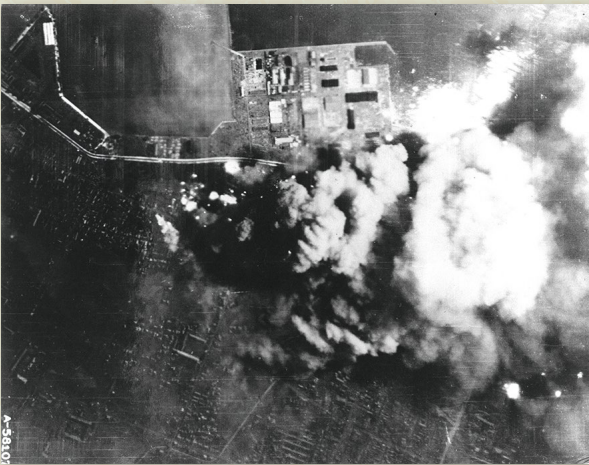


第3章 戦時下の大分と空襲

長期にわたった戦争は、市民の生活にも深刻な影響を及ぼしていきました。

昭和20(1945)年3月にはじまった米軍による空襲は、終戦の8月まで続きました。中でも、7月16日深夜から17日未明にかけて行われた大規模な空襲では、火災を起こす焼夷弾が約6000発も落とされ、大分市の中心部は焼野原になり、「大分駅から海が見えた」とつたえられています。



大分(新川・中島付近)の空襲写真
(『平和のための戦争展in大分』実行委員会)



大分市内の民家の柱に残された機銃弾

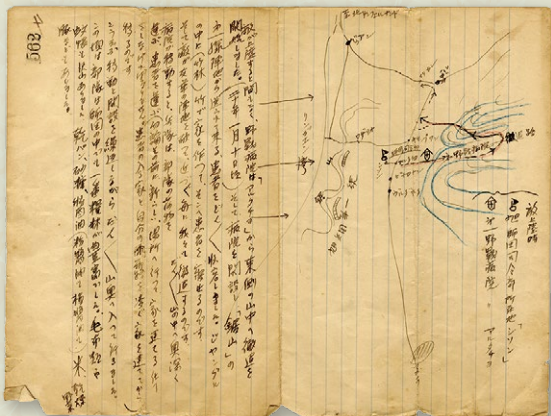


金属供出されたとみられる判田村役場半鐘

第4章 遠い故郷ー引揚げと抑留ー

長く続いた戦争は、昭和20(1945)年8月15日に終わりを告げました。しかしアジア各地からすぐに日本へ帰国できず、ソビエト連邦によりシベリアやモンゴルなどに抑留された人々が多かったです。抑留中の手記には、つらい日々を耐えた記録が残されており、抑留された人の中には、強制労働で亡くなる人もいました。

また、激戦地で安否不明になった兵士の行方を探し求める家族もあり、こうした人々に本当の平和が訪れるまでには長い時間がかかりました。



行方不明兵士の安否を知らせる手紙(昭和21年)



抑留者着用の旧陸軍コート

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol.
135
2026.7.18

令和8年夏季テーマ展示



大分
ー戦争ノキオクー
日記と手紙が伝える戦場の声

「七生報國・菊水の鍾馗」
毎日新聞西部本社版 昭和18年10月17日掲載

尾翼に菊花紋が描かれた戦闘機「鍾馗」(陸軍二式戦闘機)と、搭乗者の菊川忠司陸軍伍長(当時)を紹介する記事。

発行 大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL:097-549-0880 FAX:097-549-5766



【開館時間】入館は16:30まで 【休館日】※ただし祝日の場合は開館
9:00-17:00 月曜日(第1月曜を除く)、第1火曜日 祝日の翌日
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方と、その介護者1名は無料。◎入館時に受付で手帳を提示してください。
※都合により予定を変更する場合がございます。

発行日：令和8年7月18日

会 期

令和8年 7月18日 土 ~ 9月27日 日

大分市
歴史資料館

令和8(2026)年、昭和という時代の幕開けから100年の歳月が流れました。昭和前半の日本は、満州事変にはじまり、日中戦争、太平洋戦争と激しい戦闘が続ぎ、まさに戦争の時代と言えます。この間、大分市においても、軍隊の駐屯や、要塞、軍事施設等の整備が進められました。

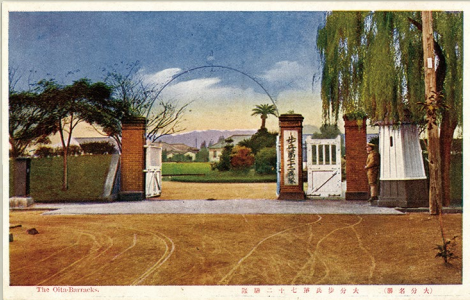
戦争が激しくなると、多くの市民が軍隊に召集されて戦地に赴き、たくさんの人々がその命を失いました。また、戦争末期には米軍による空襲で、大分の市街地も甚大な被害を受けます。そして、昭和20(1945)年8月15日に終戦を迎えた後も、すぐに故郷に帰ることができない人々が多かったです。

今回の展示は、市民から寄贈された資料を中心に、戦時下の大分の様子を紹介するとともに、出征した兵士が残した日記や手紙、回想録など一人ひとりの「生の声」に焦点を当て、これらの記録を通して、大分の人々が体験した戦争の実相に迫ります。

第1章 大分に配備された軍隊

大分市内には、明治40(1907)年、市内西部の駄原の地に、陸軍歩兵第72連隊が配備されました。大正14(1925)年に軍縮によって第72連隊が解隊になると、代わりに小倉から歩兵第47連隊が移駐し、駄原の施設を引継ぎます。第47連隊は、概ね大分県出身の兵士で構成されており、「郷土連隊」と呼ばれました。

昭和12(1937)年、日中戦争がはじまると、第47連隊は中国へ派兵されて転戦し、太平洋戦争ではフィリピンを経てインドネシアへ向かいました。昭和20(1945)年、第47連隊はジャワ島への移動中に終戦を迎え、小倉から駄原兵舎に移り37年目に軍歴を閉じました。



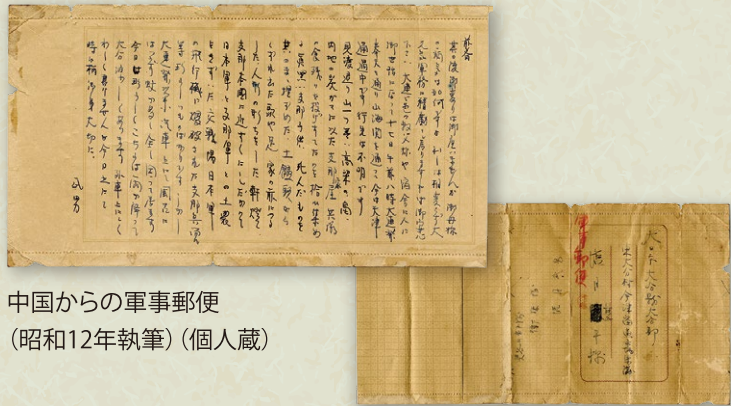
陸軍歩兵第72連隊 絵葉書



陸軍歩兵第47連隊兵舎(昭和10年頃)(個人蔵)

第2章 出征する兵士と戦場の記憶

日中戦争の開戦直後、内地で生活していた予備役の兵士も多数動員され、家族を残して戦地に向かいました。出征した後、大分に残る家族との近況報告には主に郵便が活用されます。家族との連絡手段である「軍事郵便」は、日清戦争以降の明治27(1894)年に制度化され、原則として戦地から内地に宛てた郵便は無料、逆に戦地へと送る場合は有料でした。出征した兵士たちは、自分が戦地で元気に過ごしていることや、家族を思う気持ちをしたため、「軍事郵便」が兵士たちの心の支えになったことがうかがえます。



中国からの軍事郵便
(昭和12年執筆)(個人蔵)



兵士の戦歴を書いた日の丸旗

出征した兵士たちの中には、日々の生活や想いを日記や手紙に書き記す人もいました。これらの文面からは激しい訓練や戦いのことだけでなく、戦地での日常や束の間の休息が綴られ、筆者の当時の想いを鮮明に受け取ることができます。



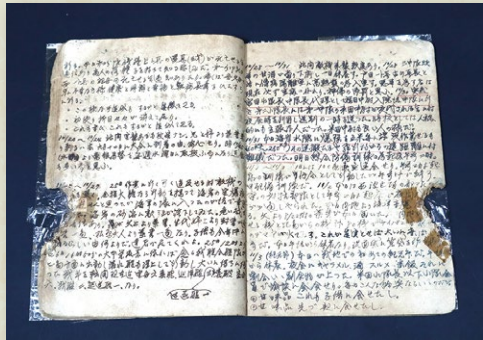
海軍兵学校 第三種軍装



いおうとうじんちゆう
硫黄島陣中日誌筆者

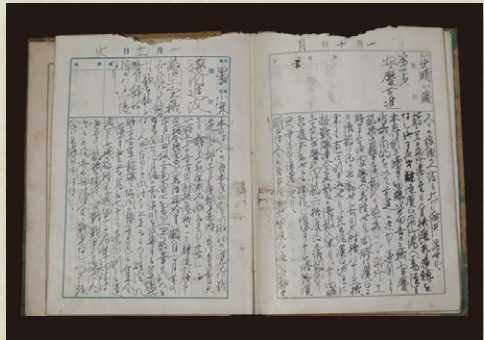


戦闘機操縦者の日記筆者



硫黄島陣中日誌(昭和19~20年執筆)

硫黄島守備隊に配属された兵士の陣中日誌で、昭和19年6月の召集から米軍上陸の一週間前まで書かれている。



戦闘機操縦者の日記(昭和18~19年執筆)

少年飛行兵出身の筆者が書いた克明な日記で、昭和18年1月から、亡くなる前日の昭和19年2月11日までの全407日に渡り記されている。

トピック 大分にあった巨大軍事施設

市内東部に位置する坂ノ市地区には、昭和17(1942)年に東京第二陸軍造兵廠坂ノ市製造所という大規模な火薬製造工場が設置されました。この施設は昭和15(1940)年、坂ノ市の広大な田園地帯を買収して建設され、九州には荒尾(熊本県荒尾市)や曾根(福岡県北九州市)などに同様の工場がありました。

また、戦争末期には、勤労働員された県内の中学生も、この工場で火薬の製造に従事していました。



東九州製造所配置図案(昭和15年11月)



米軍による空襲目標写真(昭和19年12月頃)
(国立公文書館デジタルアーカイブ)